

論点整理ペーパー及び農薬専門調査会体制

(平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定)

頁

農薬専門調査会体制（平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定）…………… 1

【参考】

（幹事会で食品健康影響評価をする農薬）

ピリフルキナゾン…………… 2

農薬専門調査会体制(平成30年4月農薬専門調査会決定)



ピリフルキナゾン（第5版）

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	追加資料
・適用拡大	キナゾリン環を有する。	害虫の摂食行動を制御する神経系又は内分泌系へ作用することにより殺虫効果を示す。	殺虫剤	・農薬抄録 ・作物残留試験（てんさい、カリフラワー等） ・遺伝毒性試験（マウスリンパ腫細胞を用いた遺伝子突然変異試験及びラットを用いた <i>in vivo</i> UDS 試験） ・海外評価書（米国）

【試験成績の概要】

1. ラットを用いた動物体内運命試験の結果、経口投与後 72 時間の吸収率は、少なくとも 63.1%と算出された。主に糞中に排泄された。主要代謝物は、尿中では P 及び Q のグルクロン酸抱合体並びに U、糞中では W の抱合体及び C であった。
2. 植物体内運命試験の結果、農作物中残留放射能の主要成分はピリフルキナゾンであった。レタスではピリフルキナゾンの減衰に伴い、ピリフルキナゾンの *N*-脱アセチル化体である代謝物 B が増加し、結球で最大 81.6%TRR 検出された。
3. 各種毒性試験結果から、ピリフルキナゾン投与による影響は、主に精巣（間細胞過形成等）、肝臓（肝細胞肥大等）及び血液（貧血）に認められた。神経毒性及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。
4. 発がん性試験において、ラット及びマウスで精巣間細胞腫が認められ、その発生機序は本剤が有する抗アンドロゲン作用を介した二次的な影響によると考えられた。
5. 繁殖試験及び発生毒性試験において、ラットの児動物及び胎児に乳頭遺残、尿道下裂又は肛門生殖突起距離短縮が認められ、これらの所見は本剤の持つ抗アンドロゲン作用によるものと考えられた。